

私を墮とせるのはただ一人？ いや、こ
こからが恋人だし！

【第 8 話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

前田香：白石インテリジェンス社員

着物の女：旅館従業員

店員：店員

○海

綺麗な海。

柊千咲、白石彩夏、神谷里見、杉園愛梨、飯田早苗、前田香、水着を着ている。

彩夏「やっぱりわたしの選んだ水着、さいっ
こー！」

彩夏、千咲を見る。

千咲「わたしだけはみ出そうなんですけど…
…」

彩夏「それがいいの、えへへ」

千咲「いやいやはみ出さないよ！」

早苗「破廉恥…」

早苗、じっとした目で千咲を睨む。

千咲「ち、違うから！ 彩夏が着てって言う
たからだから！」

彩夏「えーい！」

彩夏、千咲の胸を揉む。

千咲「あんっ！」

彩夏「どうせ水着だし、いいよねーっ！」

千咲「あ、あんっ、あんっ」

彩夏、千咲を抱き寄せる。互いの胸がぎゅつと押し付けられる。

千咲「ちょ！ 何してんのっ！」

彩夏「わたしも千咲くらいのおっぱい欲しい

！ うらやましい！」

千咲「あんっ！ ちょ、きついつ……」

彩夏「千咲、もうこのみんなにバレてるし、いいでしょ」

千咲「いいわけあるかー！ いやみんな友達でいてくれるけど！ これ以上はやりすぎ！」

彩夏「千咲」

千咲「いくらなんでも、綺麗な人にこんな強く刺激されたら、その……」

千咲、恥ずかしそうに視線を逸らす。

千咲「イツちゃう、からっ……」

彩夏の頬が赤くなる。

彩夏「千咲……」

千咲「こ、これは好きとは違うからっ！ 好

きじゃなくてもそういうことなっちゃうの
ってあるから！」

里見「彩夏！　またしばかれても知らねえぞ
おおえ！」

彩夏「あ、ごめんね」

彩夏、千咲から離れる。

千咲「いや、別に……でもやりすぎはダメだ
から！」

千咲、頬をふくらませる。

里見M「いやもうじゅうぶんやりすぎ越えて
るだろ……」

彩夏「そろそろビーチバレーしよっか」

千咲「チームどうする？」

彩夏「ぜったい千咲と同じチームがいい！」

6人、ネットを張ってビーチバレーを

開始。

彩夏、千咲、愛梨チームと里見、早苗、

香チーム。

千咲チームのコートの端にボールが飛
んでいく。

彩夏「千咲！」

千咲「おっけ！」

千咲、跳ね返す。そのまま立ち上がる。

彩夏、鼻血を出す。

彩夏「千咲！ 水着脱げてる！」

千咲「ひあっ！」

千咲、素早くしゃがむ。

彩夏、千咲を周りから隠す。

彩夏M「千咲のおっぱい触りたい触りたい触りたい触りたい触りたい」

○旅館・個室

6人、くつろいでいる。

香「ゴミムシ」

香、千咲をにらんでいる。

千咲「はい……はい」

香「次期社長に変なこと吹き込むのはやめて
ちようだい」

千咲M「いや彩夏から吹き込んできてるんで
すけど」

香「そこに正座しなさい」

千咲「はい……」

千咲、正座し、香と向かい合う。

香「あなた、名前は？」

千咲「柊千咲です……」

香「じゃあ、ゴミムシ」

千咲「ええ……」

香「白石様は次期社長に決まっているから、その隣に立つのは優秀な人間でなければならぬ」

千咲M「このくだりもうやってるんだけど……」

……

香「成績は？ 学年何位？」

千咲「前のテスト、310人中256位……」

香「その程度で、彩夏をたぶらかすような人間が、彩夏に近づいているの？ ゴミムシ」

千咲「あ、あ……」

千咲、涙目になる。

早苗、千咲の隣に座り、千咲をかばうようにそっと手を添える。

早苗「どうも、学年2位の飯田早苗です」

香「知ってる」

早苗「ここは、あたしに免じて許してください。
柊千咲は、優しい人間です」

千咲「早苗ちゃん……」

里見「そ、そうだぜ！」

里見M「な、なに言ってんだあたしは。これはあたしが首突っ込むことじゃねえだろ。
なのに」

里見「千咲は誰よりも優しいやつなんです！
だから、どうか千咲の友達を奪わないで
ください！」

里見、必死そうな表情。

千咲「里見ちゃん……」

香「はぁ……わかった。好きにきなさい。ただ、白石様。必ず、みんなの規範になっても
らいますからね……もちろん会社もついで
もらいます」

彩夏「……ええ、もちろんよ」

彩夏、拳をぎゅっと握る。

香「では、皆さんに飲み物を買ってきてさしあげます。これがその画像です、ご希望をどうぞ」

香、5人にスマホの画面を見せる。

彩夏「気が利くね、ありがとう」

香「いえいえ、お構いなく」

5人、希望を言う。

香、部屋を出る。

千咲「あ、ありがとう早苗ちゃん」

早苗「別に。彩夏が悲しむ姿を見たくないか

ったからよ」

千咲「えへへ」

千咲、早苗にすりすりする。

里見、自分の胸に手を触れる。

里見M「まだだ……」

彩夏「本当にありがとうね、早苗」

早苗「んっ」

早苗、恥ずかしそうに彩夏から視線を逸らす。

千咲「ともだちいいなあ、いいなあ」

早苗「……ああもう！　くつつかれると恥ずかしい！」

千咲「えへ、ごめん。里見ちゃんも、ありがとう」

千咲、里見に笑顔を向ける。

里見「お、おう」

里見M「なんなんだ、この気持ち……わかんねえ。あたし、どうしちまったんだ」

○同（夕方）

千咲「たのしーっ！　ともだちっていいなあ」

千咲、にこにこしている。

彩夏「よかったね」

千咲「うんっ！」

千咲、彩夏に笑顔を向ける。彩夏、ドキツとする。

千咲「夜はみんなで花火！」

愛梨「そ、そう、だね」

○花火専用施設（夜）

千咲以外の着物姿の5人、花火の準備をして集まっている。

里見「千咲まだかよ」

早苗「着物に手間取ってるのよ。早くしてくれないかしら」

彩夏「まあまあ早苗。待とうよ」

早苗「彩夏が言うなら」

千咲「待たせてごめん！」

千咲の大きな声を聞き、5人が千咲の方を向く。

千咲、満面の笑み。明かりが、着物姿の千咲の姿を鮮明にうつす。

里見「……！」

里見、手で口を覆う。

○女子高・3の3教室（朝）

里見N「それから、長い夏休みが終わった」

里見、ぼーっとしている。

里見「はあ」

千咲、里見のもとに歩み寄る。

千咲「里見ちゃんおはよう！」

里見「お、おう」

千咲「なにか悩みでもあるの？」

里見「えっ」

千咲「なんかさ、夏休み中ずっと上の空でさ」

里見「それは……」

里見M「そんな心配そうな顔向けられたら、
どうすりゃいいのかわかんねえよ」

千咲「よしよし」

千咲、里見をなでなでする。

○同・屋上（夕方）

きれいな夕日が空に見える。

里見、手すりにもたれかかっている。

千咲「里見ちゃん、来たよ」

里見「お、おう」

千咲「どうしたの？　ずっと元気なさそうだったし、何かあるなら話聞くよ？　何か悩みがあるから呼んだんだよね？」

里見「そ、それは」

里見、拳を握る。

里見「そ、そうだぜ」

千咲「やっぱり。ほら、何があつたのか聞かせて？」

里見「あ、あたしは」

2人の髪が、風でなびく。

里見「す、好きなんだ」

千咲「え？」

里見「ち」

千咲 「うん うん」

里見「千咲のことが、好きなんだ」

千咲 「うん うん …… うん？」

千咲、固まる。

千咲「え、ええつと」

里見「あたしは千咲のことが好きなんだ！」

千咲「え、ええええええええええええつ」

千咲、目を見開いて驚く。

千咲「そ、そうだったの？」

里見「う、うん。この気持ち、恋だって気づいて……我慢できなかったんだ」

千咲「そ、そっか……」

千咲N「あまりに衝撃的な言葉に、わたしはそれ以上の言葉を返せなかった」

○同・3の3教室

生徒たちが、昼食をとったりしている。

千咲、席に座ってゲームしている。

愛梨「千咲ちゃん、なーにしてるの？」

千咲「あ、ゲームだよ。見る？」

彩夏「見る！」

愛梨「見る」

愛梨、千咲に腕を絡める。

愛梨と彩夏、千咲のゲームプレイの様子を見る。早苗、勉強している。

里見、扉をあけて教室に入る。

千咲「あ、里見ちゃん！ ゲームやる？」

里見「お、おう」

里見、愛梨と千咲を見て呆然とし、床に弁当を落とす。

千咲「里見ちゃん？」

14

里見「っ……！」

里見、齒を食いしぼりながら涙を流す。

千咲、里見の顔を見てはっとする。

里見、勢いよく教室を飛び出す。

千咲「待って里見ちゃん！」

千咲、扉まで走り、止まる。

○同・下駄箱

里見、靴を履き替えている。

里見「あっ」

千咲「あっ」

千咲と里見、向かい合う。

里見、走り去る。

千咲、里見に向かって手を伸ばし、降

ろす。

千咲「里見ちゃん……」

○同・3の3教室（朝）

千咲N「わたしの優柔不断な言動のせいで、

里見ちゃんと話せなくなった」

千咲、里見の席を見つめる。

早苗「千咲」

早苗、千咲のそばに立つ。

千咲「ど、どうしたの？」

早苗「今日放課後、あたしとお茶しましょう」

千咲「あ、いいけど」

早苗「ありがとう」

早苗、彩夏のほうに向く。

早苗「彩夏。きょうの放課後、千咲借りるわ

よ」

彩夏「あ、うん」

○通学路

2人、並んで歩いている。

○カフェ前

2人、カフェ外観を眺める。

早苗「ここでいいわ」

○カフェ・内装

2人、店員に席を案内されている。

店員「メニューはそちらのタッチパネルから
ご注文ください」

店員、その場を去る。

2人、向かい合って座る。

早苗「あなた、仮面ライダーシリーズ何が好き？」

千咲「え？ ああ…エグゼイドとか好きだなあ。あのダサイレベルワンのデザインに愛着わいちゃってさー。ゲーム好きだから好きになったのかな？」

早苗「ふふっ。千咲らしいわね」

早苗、笑う。

2人、タッチパネルで注文を済ませる。

千咲「今も見てるって言ってたっけ？」

早苗「見てるわ」

千咲「ほんとに」

千咲。少し身を乗り出す。

早苗「あたしはダブル、オーズあたりが好きね。リアタイ世代じゃなかったけれど、あ

とで見たの」

千咲「わかる！　昔さ、家族でカップ麺のイベント？　みたいなのに行って、そこでカップにオーズ描いた！　ママはキングスライムとか描いてたっけ」

早苗「何それ楽しそう」

千咲「ま、柊家のどっかに埋もれてるだろうから今はないけどね」

早苗「うらやましいわ。ちょっとやってみた
い」

千咲「そう？　市販のやつ買ってやる？」

早苗「それじゃあ特別感がないわよ」

早苗、笑う。

店員、歩いてくる。

店員「お待たせしました」

店員、2人が注文した品をそっと席に置き、その場を立ち去る。

早苗「気が晴れた？」

千咲「えっ。えっと」

早苗「無理には聞かないわ」

千咲 M「まさか、気づいて……」

早苗「最初はあなたにきついことを言ったけれど、今では友達だと思っているわ。今日お茶に誘ったのも、彩夏のためじゃなく……あなたのため」

千咲「あ、ありがとう」

早苗「ほら、隣に座って」

千咲「あ、うん」

千咲、早苗の隣に移動。

早苗「千咲」

早苗、千咲の頭をなでる。

千咲「あ、あ」

千咲、目に涙を浮かべる。

早苗「今は他の誰にも見られていないし、あたしにすがって泣いてもいいわ」

千咲「あ……あ、あう」

千咲、早苗に体を寄せ、肩をふるわせて泣く。

千咲「わたしが、わたしがもっとちゃんとしていれば……」

早苗「悩んでいるの？」

千咲「……」

千咲、ゆっくりうなづく。

早苗「あの彩夏が優しいってほめた女の子だもの。優しいって、伝わってるわ。だからこそ、相手を傷つけまいとおもんばかっているからこそ、つらくて涙をこぼしてしまっているのよ」

早苗、ケーキを口に運ぶ。

千咲「早苗ちゃん……」

早苗「大丈夫」

千咲「どうすれは……」

早苗「正直、相談には乗れるけど、告白とかそういうことを手伝うことはあまりできない。自分で伝えるべきだから。だから、どうしても想いが伝えられなかったり、またつらくなったりしたら、あたしに相談しなさい」

千咲「う、うん」

早苗「千咲。今日はずうちに寄らない？」

千咲「……そうする」

○飯田宅・寝室（夜）

千咲N「今日1日、早苗ちゃんはわたしのそばにいてくれた。普段見ない優しさを感じた」

千咲と早苗、同じベッドで寝転がっている。隣には両親。

早苗「千咲。あなたと話せて、とても楽しいわ」

千咲「あ、ありがとう」

早苗「あたしは恋愛をしたことがないけれど、千咲の悩み具合、すごくよくわかるわ。千咲には、時間が必要」

早苗、千咲の頭をなでる。

早苗「だから、いっぱい悩みなさい。そして、後悔のない決断を出しなさい。でも、待たせるにしても、そこは早めに結論出して伝えた方がいいわね。何カ月待ってください、みたいな」

千咲「うん」

千咲、こくりとうなずく。

○飯田宅・玄関（朝）

早苗と千咲、靴を履き替えている。

早苗「さあ、行きましょう」

千咲「うん」

○女子高・校門（朝）

千咲と早苗、校門をくぐる。

○同・3の3教室（朝）

扉が開き、千咲と早苗が教室に入る。

彩夏「お、おはよー！」

里見「おはよう」

愛梨「おはよう」

千咲と早苗、3人のもとへ。

千咲、スマホをいじっている。

里見のスマホに、千咲からの通知が送られてくる。

千咲のメッセージ「今日放課後、話しがあるの」

里見 M 「千咲……」

里見、メッセージを打つ。

里見のメッセージ「わかった」

○通学路

2人、並んで歩いている。

里見「で、なんだよ」

千咲「まえの告白のことなんだけどね」

里見「……おう」

千咲「里見ちゃんといると、すごい安心して、すごい心があったかいもので満たされるの」

里見「ふえっ」

里見、声が裏返る。

千咲「でも、いっぱい考えたんだけど、これが恋の気持ちなのかがよくわかんなくて。だから、その……1カ月。自分の気持ちを確かめる時間が欲しいの」

千咲、里見をじっと見つめる。

千咲「いい、かな」

里見、千咲の手を取る。

里見「おう。ごめんな、うまく話せなくて、

千咲を苦しめちゃって。千咲の気持ちが決
まるまで、待ってるから」

千咲「いい、の？」

千咲、目に涙を浮かべる。

里見「千咲、好きだ」

里見、千咲を抱き寄せる。

里見「ありがとうな、素直な気持ちを伝えて
くれてよ……」

千咲「う、うんっ……！」

千咲N「いつもの毒舌が全くない、今まで見
たことないくらい優しい里見ちゃんに、わ
たしは安らぎを感じた」